

---

# 副作用の賜物

都神紗茅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

副作用の賜物

### 【Nコード】

N 6 4 7 5 B

### 【作者名】

都神紗茅

### 【あらすじ】

たくさんの人の協力を借りて、組織を倒したコナン。それから一ヶ月後、哀がAPTX4869の解毒剤を完成させた。それを飲んだまでは良かったが、鏡を見たら……そこには工藤新一ではなく、女の子の姿があった！？

## 第一話：ついに……

「ついに完成したわ、工藤君」

哀がパソコンの画面から振り向いて、こう言った。

後ろに立っていたコナンは、長年の願いが叶ったことを実感できず、変に冷静にうなずいた。

「何よ、元の姿に戻るのを一番待ちわびていたのはあなた自身でしょ？ その割にはずいぶんと冷静ね」

そう言って哀は、パソコンのディスプレイに目を戻す。そして資料を保存し、シャットアウトした。マウスから手を離れたあと、パソコンの横に置いてある一粒のカプセルを手にとった。そのあった位置の周りには、沢山の紙束と薬品が置いてある。

哀が試行錯誤しながら、開発に取り組んでいた証だ。

「オメーにはすごく感謝してっから。何だか、実感がまだわかんないんだよな。組織を倒したってことも、解毒剤が出来たってことも」

そう言いつつ、コナンは一ヶ月前のことを思い出していた。



## 第一話・ついに……（後書き）

感想や突っ込みなど、何でもいいのでこの小説に対する意見を書いていってください。よろしく願いします！

## 第二話：副作用が現れた！

木枯らしの吹く、十一月のことだった。

たくさんの方の協力を借りて、組織を壊滅させたのは。

それなりの作戦を立てて、アジトの中へと突入した。

コナンはもちろん、周りの人々の活躍により、したっばらはお縄にできた。

しかし、組織の上層部にいるジンとベルモットには苦戦した。

二人とコナンらが対面した中、緊迫した空気が流れた。

今にも銃撃戦が始まりそうな位の。しかし、それが始まることは無かった。

ベルモットの方が、持っていた銃で自殺をしたのだ。

銃弾は彼女の頭を貫通しており、即死のようだった。

もう逃げられないと悟ったのか、ジンもそのあとを追うように自殺した。

思いもがけない展開に、コナンらは戸惑った。

特にコナン自身は、彼らを絶対に生かしてこの手で捕まえようと思っていたので、悔しさを周りに隠しきれなかった。

しかし、そうしていられる状況では無かった。

大量の血を流している二人の後ろには、一つの扉があったのだ。

その先にあるものを確信したコナンらは、先へと進んでいった。

恐る恐る開けた扉の先には、一つの机、椅子、そしてそれに座っている一人の男性の姿。

その場にいた者達全員が、目を疑った。

まさか、組織のボスが、

世界屈指の推理作家であり、コナンこと、新一の実父・工藤優作だったなんて。

彼は、立ち尽くしているコナンらに向かって一言だけ言った。

「自首するよ。今まで色々済まなかったな、新一」

その後優作は、自分の足で警察へと向かっていった。  
だが、彼から真実を聞くことはなかった。

「じゃあ、これ」

回想の中に浸っていたコナンに、哀が一言だけ言ってカプセルを手

渡した。

この一ヶ月、彼女が努力を重ねた結果を。コナンが受け取った時に「彼女と幸せにね」と付け加えた。

それからコナンの横を通りすぎて、哀は階段への扉に手をかけた。

「オメーにしては、珍しいこと言うじゃねーか？」

小さな背中に向かって、コナンがからかいを含めて言った。その言葉に、哀が静かに振り向いた。

「そう。なら、ごめんなさいね。余計なこと言って」

そして、ジト目でコナンを見ている。

「相変わらず可愛くねー女。それより、オメーはこれからどうするんだ？」

そうコナンが言った瞬間、哀は顔を扉に戻した。

その姿を見、カプセルを手の上に乗せたままコナンは立っていた。

そして哀は振り返りもせずに、扉を少し開けて言った。

「私は元の姿に戻る気は無いわ。これが、今までやったことに対するせめてもの罪滅ぼしのつもりよ」



それだけ言うと、扉の向こうに歩いていった。  
扉の閉まった音は、その場に大きく響いた。

コナンはその扉から、視線を手の上にあるカプセルに移した。

（灰原、本当にありがとな。そして、蘭。もうすぐオメーんところに帰るからよ）

カプセルを握りしめて、哀の消えていった扉を開いた。  
そして、階段を一段一段、踏みしめるように歩いていく。

階段を上がった先にいた博士に色々言った後、コナンは博士の家の隣にある家へと向かった。そう。そこは、工藤新一の住んでいた家だ。

コナンはしばらく蘭の家に居候していたせいか、自分の中には懐かしさが込み上げてきた。

玄関の鍵を開けて、静かに中へと入る。

しばらく掃除をしていなかったせいか、妙に埃っぽかった。

ごほごほむせながら、コナンは二階の自室へと向かっていった。

そこに、自分の着ていた服が入っているタンスがおいてあるのだ。

部屋に着くと、タンスの中から適当に服を取り出した。

コナンが着ていた子供サイズの服から、それに着替えた。

そして、ふーっとため息をついた。

緊張のせいだろうが、カプセルの乗っている手はかすかに震えている。

この家の水道は止められているため、コナンはあらかじめ水を分けてもらっていた。

カプセルを持つ手とは逆の手に持っていたペットボトルに、それは入っている。

ペットボトルのふたを開けて、コナンはカプセルと共に水を口に流し込んだ。

飲み込んですぐに、激痛がコナンの全身を襲った。

特にその中でも、心臓に来ている痛みはひどかった。

そのあたりを手でぎゅっと押さえながらコナンは余りの痛みに、床へ崩れ落ちるように座り込んだ。

目の前の景色が、段々霞んでいく。

。

どのくらい時間が経ったのか、分からなかった。

コナンは、意識を取り戻した。

手のひらを見てみると、自分が工藤新一に戻ったことを確信した。近くに置いておいたペットボトルを手に取り、立ち上がった瞬間。心臓に、再度痛みが襲ってきた。

思わず、痛んだ部分に手を当てた。

しかし新一は痛み以外のことに驚き、当てた手を離れた。片手に持っていたペットボトルが、床の上に落ちた。

新一は改めてもう一度、その場所に手を戻す。置いたところで、手を握ったり開いたりした。まばたきを何度もして、言葉にはしないけど、自分の嫌な予感を確信していた。

（おいおい、まさか）

新一の嫌な予感というのは、何と新一の胸がかすかにふくらみを持つていたと言うことだった。

異変は、それだけではなかった。

床に落ちたペットボトルを拾おうと、身をかがめた時。

目の前に、普通なら見えないはずの髪の毛が見えたのだ。

恐る恐る新一が頭に手を伸ばしてみると、明らかに髪が伸びているようなのだ。

頭の中から毛先までたどっていくと、大体肩下五センチの長さで分かった。

新一は自分の姿を確認しようと、水がほとんど残っていないペットボトルと共に階段をかけおりた。そして洗面台の前で立ち止まった。その瞬間、新一は目を大きく見開いた。

鏡に写っていたのは工藤新一ではなく、何と高校生くらいの女の姿だったのだ。

本来の新一より少し身長は小さくなっているが、よく見てみると新一の顔立ちの面影があるようだった。

予感が本当に確信　現実のもの　になって、新一はしばらく言葉を失った。

そしてしばらくして、

「ど、どういうことだよ……？」

という声が、静かだった空間に大きく響いた。

その声さえも、新一のとはかけ離れてしまっていた。  
さっき飲んだカプセルとの関連性を完璧に確信して、新一は家の玄関へと走って行った。

そして扉を勢いよく開け、一応鍵を閉めた後。  
その場所から、隣の博士の家をじっと見つめた。

## 第二話：副作用が現れた！（後書き）

第一話よりかなり長くなってます。あと、一ヶ月前の回想が無駄に多くなってしまうました・・・他に突っ込みやら何かあったら、ご意見お願いしますm（――）m

### 第三話：新一の決意

そして、新一は博士の家を訪ねた。

「君は誰じゃ？」

新一の顔を、博士は不思議そうにじつと見ている。  
目の前にいる女の子が新一だとは、全く気付いてないようだ。

「工藤新一だよ！ さつき灰原に解毒剤貰った」

「何を言ってるんじゃない？ 君は女の子じゃろう」

新一が小さくなってしまったときも、博士は最初信じてくれなかった。

また最初からか、と新一は本日二度目のため息をついた。

「あなた、まさか……工藤君？」

そんななか、博士の後ろから哀が顔を覗かせた。

「ああ、そつだよー！」

哀の言葉に、新一は目を輝かせた。しかしその新一とは反対に、哀は表情を曇らせた。

それに新一は気づいて、目をぱちくりさせた。哀はその新一に背を向け、顔だけ振り向いた。

「とにかく、中に入って」

そして、静かな声で言った。哀の真剣な声に、新一と博士はただならぬ雰囲気を感じた。

家のなかへと歩いていく哀のあとを、戸惑いつつついていった。

特に博士は、まだ新一の正体を疑っているのか戸惑いを隠せていなかったようだ。

そのまま、新一のあとをついていく。

「……ってわけだよ」

新一は、哀に解毒剤を貰ってからのことを全て話した。

哀は座ったまま、静かにただ新一の話に耳を傾けていた。

「オレがこうなった理由、オメーは何か分かったか？」

静かにしていた哀に、新一は話しかけた。

哀はしばらくうつむいていたが、顔をゆっくりとあげた。

「ええ。分かるも何も、確信してるわ。あなたがこうなったのは、さっき私があなたに渡した解毒剤のせいだってことをね」

「えっ？」

新一は哀の言ったことを、何となく予感していた。

しかし改めて聞かされると、驚きを隠せない。

その新一の様子を見て、哀の表情は焦りに変わった。

「完璧なものができたはずって、さっきあなたに言ったじゃない。だけど、それは嘘だったのよ。解毒剤の成分に、どうしても必要なものがあつたの。それは、一般論で、無事が保証されていたはずだったの。でも、高をくくってたわ。その成分は少ない確率でだけ、女性ホルモンが一時的に莫大に発生してしまう副作用を持っているの。そのことを知りながら、確率は小さいから大丈夫と思って具体的な対策を怠った。本当にごめんなさい」

哀が言葉を言い終えても、新一は表情を変えずにその場に立っていた。

その姿に責任を感じて、哀は再びうつむいた。

彼女は膝の上にある手を、強く握りしめていた。



「バーロ、後悔していても何も変わらねーよ。止まってるしないで、先に進もうぜ?」

ふっと笑いながら、うつむいている哀を励ました。

その哀は顔をゆっくりあげると、こくりとうなずいた。

「莫大に発生してしまった女性ホルモンは、もう止められないわ。だから、それと逆のことをすれば」

「つまり、男性ホルモンが大量に発生する薬があれば良いってことだな?」

「その通りよ。急いで調べてみるわ」

駆け足で地下室に向かった哀の姿を見送ってから、新一はソファーに腰かけた。

それから両手を組み合わせ、肘を膝の上に乗せる。

そして組み合わせた手の上に、顎を乗せた。

(薬のことは灰原に任せるとして)

新一の脳裏に浮かぶのは、自分をずっと待っていてくれる幼馴染の顔。

「新一君、蘭君はどうするんじゃない？」

まるで新一の心を読んだかのように、博士の声が新一の耳に届いた。新一は、そのままの姿勢を崩さずにもう一度考え始めた。

一ヶ月前、コナンとして別れを蘭に告げたとき、蘭はただ優しく微笑んでいた。

文句も泣き言も、何も言うことなく。ただ気にかかるのは、その蘭の笑顔。

笑っているのに、まるで泣いているみたいに見えたのだ。

だからその表情が、新一の心と頭のなかにに染み付いていて。

新一は決意して、顔をあげた。

「組織もぶつつぶれたことだし、もうアイツに全部話してもいいよな？　こんな姿だけど」

「そうじゃな。じゃあ、ワシが電話するよ」

博士の言葉に、新一はゆっくりうなずいた。

それを確かめて、博士はソファから立ち上がって受話器を手にとった。

蘭の家の番号を押すと、何コールかして蘭が電話に出た。

『はい、毛利探偵事務所です』

「おお、蘭君か。今、暇かのう？」

『博士？ うん、大丈夫だよ』

「そうか。じゃあ、これからワシの家に来てくれんかのう？ 新しいゲームが完成したんじゃ。歩美君たちは、皆用事があると言っているんじゃ。だから、蘭君に感想を聞かせて貰いたいんじゃが」

『分かった。じゃあ、これから行くね』

「ああ」

電話を元の位置に戻すと、博士は新一に振り返った。

新一はこくりとうなずいて、玄関の方向に目をやった。

（今のオレはまだ本当の工藤新一の姿じゃないけど、もう嘘をつくのはやめるからな）

そして博士は、お茶を淹れるためのお湯を 沸かすためにキッチンへ向かった。

やかんを戸棚から取り出し、水を入れる。

静かな室内に、その音は大きく響いた。



#### 第四話：再会

新一は虚空を見つめて、ソファーナ上でじっとしている。  
長い髪を、時折邪魔そうに振り払いながら。

「そうじゃ、新一君」

「ん？」

突然博士に名前を呼ばれて、新一は目をぱちくりさせた。  
物思いに耽っていたため、少々びつくりしたのだ。

博士は、火にかけたままのヤカンをちらちらと見る。

まだ沸かないか、と判断して博士は戸棚を開いた。

その中にあるお茶のパックを取り出しながら、言葉が続けた。

「その声でその口調、念のためじゃがやめたらどうじゃ。いくら哀君でも、今すぐ薬を完成させるのは無理じゃろ？ だからといって、ずっと家の中にこもっているのも何じゃし。まあ、ワシや哀君の前じゃったらそんな必要は無いんじゃないが」

「ハハハ、ガキの次は女のフリってか？」

苦笑しながらも、新一の頭の中では博士の言葉が響いていた。

新一の解毒剤を作っていたせいで、哀は約一ヶ月の間ずっと地下室

にこもっていた。

新一は、そう博士から聞いていた。

彼女の性格上表には出していないが、それによるストレスや疲労が相当たまっているだろう。そのことを、新一は言われなくても分かっていた。

急に、ヤカンが、笛のようなけたたましい音を上げた。

静まり返っていた空間に大きく響いて、その場にあつた緊張感を一気に吹き飛ばした。

博士はお茶のパックをカウンターに置いて、コンロの火を止めた。

「こんにちは」

その直後に、玄関から蘭の声が聞こえた。

新一はびくつと体を震わせて、コンロの前にいる博士に必死に目配せをした。

新一の言いたいことを察して、博士は玄関へと小走りで行く。

「おお蘭君、上がってくれ」

「邪魔します」

「今回のも、なかなかの力作じゃ」

「ね、ねえ博士。もしかしたらの話だけど、今日わたしを呼んだのってゲーム以外の話だったりしない？」

「え？ ま、まあ。それはリビングでな」

「うん」

その声と二人の足音に、新一は深呼吸してソファから立ち上がった。

その直後、玄関につながる扉が開いた。

それと同時に、扉を開けた蘭とぼつちり視線が合った。

新一は蘭に全て話すと決意したときから、表情に出さなくとも心中は不安でいっぱいだった。

蘭は、どう反応するのかと。コナン「新一だと言つこと、そして新一は元に戻らずに女の姿になってしまったことの二つに。

重々しい空気が流れる中、蘭が先に口を開いた。新一はごくりと唾を飲み込む。

「もしかして、博士の親戚の子？」

「あ、いや、それは」

博士は返事にならない返事をし、困っているような表情で新一に顔

を向けた。

その博士の視線を追って、蘭は新一をもう一度見つめてみる。それから、ゆっくりと近づいていった。

一メートル前で立ち止まり、新一の顔をじつと覗きこんだ。

「ねえ、名前は？」

その言葉にドキツとして、新一は一旦視線を横に流しうつむいた。その仕草を不思議そうに見ながら、蘭は瞬きを何度か繰り返す。

「な、名前は」

言いかけてから、うつむいていた顔を思いきって上げた。

「忘れちゃったのかよ？ オメーの幼なじみの工藤新一だよ」

蘭が気付いてくれるよう、あえて口調はそのままにした。

しかし、声が高すぎた。新一には、大きな違和感が残った。

「え？」

新一の言葉に、蘭は大きく目を見開いた。そして、更に新一に近づいてきた。



両手ではさみこんで、新一の顔をぐつと近づけた。  
そして、隅から隅までまじまじと見つめる。  
その行動にドギマギしつつも、新一は内心淡い期待を抱いた。

「新一、じゃないでしょ？ どう見ても女の子だし」

蘭の言葉に、新一の淡い期待はどこかに消え去った。  
蘭は新一の顔を解放すると、両腕を下ろした。  
まあ、しょうがないかと思い新一は少し考えて言った。

「信じるか信じないかはオメーの自由だけど、オレは……工藤新一は、江戸川コナンなんだよ」

「コナン君が、新一？」

蘭の言葉にうなずき、新一は静かに話し始めた。

トロピカルランドの時の話、自分を小さくした組織の話、最後にその組織を倒した話を偽りなく全て話した。初めて聞かされた真実に、蘭は戸惑いを隠せなかったようだ。しかし話が進んでいくうちに、新一の言葉を信じ始めていった。

話し終えた時、新一の目を蘭は強く見据えた。

「やっぱり、わたしの気のせいじゃなかったのね。コナン君って、色んな意味で新一みたいだったもの。あなたが新一で、ちょっと前までコナン君だったってことは十分分かった。でも」

新一は、何かしらの嫌な予感がして思わず視線を逸らした。  
蘭は少しばかり後ろに下がると、体をぐつと捻らせた。

「うわっ！」

そして、新一の顔面めがけて右後ろ回し蹴りを放った。

新一は咄嗟に目をぎゅっとつむり、両手で顔の右側面をかばった。

蘭の足は、間一髪で新一には当たらずに手前で止まった。

その余りの勢いに、新一の伸びた髪がぶわつと揺れた。

硬直してしまっている新一に、蘭は足をすつと下におろした。

「新一のバカ！ どうしてそんな大事なこと、わたしに教えてくれなかったのよ。あんなに近くにいたのに」

蘭は、今にも泣きそうな表情だ。

その蘭の言葉に負い目を感じ、新一は黙り込んでしまった。

組織から蘭を守るためには、そうするのはしょうがないことだった。

そのおかげで、最後まで関わらせることが無くて済んだ。  
しかし蘭を泣かせて、不安にからせたのは自分だ。  
複雑な思いが、新一の中でぐるぐる渦巻く。

そんな新一に、蘭の後ろから博士が気を利かせていった。

「新一君は、蘭君を危険な目に合わせたくなかったただけなんじゃ」

その言葉に、蘭は博士に振り返った。

## 第五話：苦勞の始まり？

「新一のこと、博士も知ってたの？ だったら」

言いかけて蘭は、溢れんばかりに涙の溜まっている目をぎゅっとこすった。

しかし、涙がなくなることにはなかった。

蘭は、涙が溢れるのを防ぐので精一杯だったのだ。

言葉につまった蘭に、博士は閉じていた口を開いた。

「ワシが新一に“工藤新一が生きていることを組織に知られたら、周りにいる人間にも危害がおよぶ”って言ったんじゃ。それで新一は」

「そう、なの？」

博士の言葉に蘭はもう一度目をこすり、新一へ改めて振り返った。

よくよく見てみると、女の姿ではあるが面影が残っているような気がした。

蘭から見てその新一の態度は、博士の言っていることを裏付けているようだった。

蘭は一呼吸して、新一の前までゆっくりと歩いていく。

そして立ち止まると、静かに言った。

「ありがとう、新一」

短い言葉。だけど、たくさんの意味と思いがこもっていた。

それを感じ取った新一は、パーカーのポケットから蝶ネクタイ型変声機を取り出した。

「それは、コナン君の蝶ネクタイ？」

新一が、コナンの時に色々と活用していたものだ。

その機能知らない蘭は、新一が何をしようとしているのか分からなかった。

不思議がる蘭を横目に、新一はダイヤルをくるくると調節して、一部分で指を止めた。

オホン、と咳払いしてから蝶ネクタイ型変声機を口の前に持ってきた。

「博士も言ってたけど、小さくされちゃった時からずっと決めてたんだよ。オメーをあいつらから絶対に守るって。オメーのこと、一番大切にしたいって思ってたから」

新一の声で、そう言ったのだ。女の声じゃなくて、自分の声で伝えなかったからだ。

とはいえ、機械から出た声。心の中では、

（ごめんな、今はまだ本当の声じゃ伝えられない。だけど、元に戻ったら）

と思っていた。

新一の言葉から数秒だけ間が空いて、蘭はフツと微笑んだ。

「これからは、一人で抱え込まないでね。何かあったらわたしにすぐ相談して。新一の力になりたいの」

新一は、その言葉にくくりとうなずいた。

それを確認すると、蘭はその新一の手から蝶ネクタイ型変声機をすっと取り口の前に持ってきた。そして、色々試して喋っていた。もちろんそこから聞こえてくる声は、新一の声。

「コナン君になってる間の電話は、これを使ってたんだ？」

新一の声のまま、蘭が言った。

蘭の口調の自分の声を聞いて新一は違和感を感じたあと、うなずいた。

蘭は、ありがとうと言って新一にそれを返した。

それから、しばし沈黙。

しかしその空気は、新一の話を蘭が聞いていたときとは違い、重々しさが抜けていた。

「ねえ、元に戻るまでわたしの服着る？」

沈黙をさえぎって、蘭がいつもの笑顔で言った。

その言葉に新一は顔を赤らめ、目をぱちくりさせた。

「バー口、それは」

言いかけてから、新一ははっと口を押さえた。

ただの照れ隠しのつもりではあったのだが、蘭は、間違った捉え方をしているだろうか。

そう思っ、新一は恐る恐る蘭を見た。

新一には、目の前の蘭が今にも蹴りを繰り出してきそうにも見えた。腕を組んで、じっと新一を見ている。

「ら、蘭」

焦っている新一を見て、蘭は怒りの表情から一転、さっきの笑顔に戻った。

「じゃあ、近くに新しく出来たショッピングモールに行って、買い

物してこない？　ずっと行きたかったんだけど、部活が忙しかったりしてなかなか機会が無かったのよ。いいよね？　新一が新一に戻ったあとだって、わたしが着ちゃえばいいし」

新一は蘭の言葉に、無意味に何度もうなずいていた。自分は勘違いしていたのだと気づき、心底安心していたから。

「それまでは、わたしの服で我慢しててね？」

蘭の家までは、新一の意思で博士の車で行った。到着した瞬間、さーと新一は事務所の階段をかけ上がっていった。周りの人の視線を、気にしていたからだ。それを分かっていた蘭は、博士に色々お礼を言った。それから後ろからゆっくり付いていきながらクスクスと笑った。

「これはスカートだし、えーっと」

蘭は、クローゼットの中をのぞきこんでいる。その後ろにいる新一は、完全に閉まりきっていない扉の隙間からリビングをじっと見ていた。つい一ヶ月前までは自分がそこにいたら、妙に懐かしさが込み上げてきていたのだ。ここが自分の家だったかのような気もしていた。物思いにふけっている間、蘭はたくさんの服を新一にあてていた。



「どっ？」

そう言われて、新一は自分にあてられている服を見た。

「ああ、これでいいかな」

特にこだわろうと思っていなかったのも、あまり深く考えずに言った。

早速着替えてみる。着終えた新一の姿を見て、蘭はどこか嬉しそうにはしゃいだ。

「新一、すごく似合ってるよ！」

「そ、そうか？ すっげー違和感あるけどな」

蘭の心からの誉め言葉も、新一は軽く受け流した。  
最初は、どう受け止めればいいのか少し迷ったのだが。

「じゃあ、行こっか」

うなずくと、蘭は新一の腕を軽くつかんだ。それを合図に、新一と蘭は部屋の外へと歩き出した。

## 第六話：いざ、ショッピングモールへ！

「面影は残ってるけど、新一って美人だよな。さすが、有希子おば様の子供ね」

更に冷たくなった風に吹かれながら、コンクリートの道を歩いていく。

新一の履いているブーツのヒールが道に当たる音が、新一自身の耳にやけに響いていた。

今までは、当たり前だがヒールのついていない靴を履いたことがなかった。

だから、周りには歩いている姿さえもぎこちなく見えているはずだ。

「それって喜ぶべきな」

「言葉遣い、一応気をつけたほうがいいかも」

蘭の気を利かせた突っ込みに、新一ははっとした。

そして、誰かに誤魔化すように付け加えた。

「のかなあ？」

誤魔化そう誤魔化そうと思いついで、語尾が上がりすぎて間抜けな声になってしまった。

「そうそう！ そんな感じ」

微笑んだ蘭を横目に、苦笑した。はつきり言って、子供の振りよりきつい。

前は子供になったとはいえ、性別はそのままだったから。

本日何度か目のため息について、肩をがっくりと落とした。

蘭の言っていたショッピングモールは、一週間前にオープンしたばかりだった。

都内最大級と言うのがキャッチコピーで、四階立てで全て吹き抜けになっている。

食材や服、雑貨はもちろん、CDショップや映画館、医者まで入っている。

新一と蘭は、中へと足を踏み入れた。

そこから見るだけでも、相当の人数がいると予測できた。

子供からお年寄りまで、色々な年齢層が集まっているだろう。

そんなことを考えながら、新一は入り口に置いてあったパンフレットを二つ取り、片方を蘭に渡した。そして、自分の手に残ったものを広げる。

中には、店の名前と見取り図が並んでいた。

細かい字が並んでいる様子は推理小説で慣れていたが、これだけは目がおかしくなりそうだと感じた。

「じゃあ、ここに行ってみない？ わたし、このブランド結構好きだし。今の新一にもすごく似合うと思うから」

蘭が、パンフレットの中の一つの店の名前を指差した。

蘭の指差している先を見てから、新一はろくに考えずにうなずいた。特にと言うか、全く興味が無かったこともあった。

その新一に気づいているのか気づいてないのか、新一には分からなかったが、蘭はパンフレットを折り畳んで、じゃあ行こう、と新一に言った。

「これがいかなあ。でも、あれもかわいいな」

いそいそと洋服を見ている蘭を尻目に、新一は早くもダウンしていた。

店の近くにある椅子に腰掛け、吹き抜けの真下を覗き込んでいた。まるで、下を歩いている人々がアリの大群に見えてくる。

その新一を見て、蘭は手に取っていた洋服を元あった場所に戻し、新一の元へと歩いていった。

「自分でどれがいいか選んで？」

「いや、別に何でもいいから、蘭が選んで」

そう答えた新一に、蘭はうーんと黙りこんだ。

「蘭？」

新一は、蘭の顔を覗き込んだ。

（オレ、何か言っちゃいけねーことでも言ったのか？）

しかし表情からして、怒っているようには見えなかった。  
蘭は顔を上げ、どこか深刻そうに言った。

「やっぱり、名前を決めておいた方がいいよね？」

服の話じゃなかったのかよ？ そう新一は思った。

「何の？」

椅子から立ち上がり、蘭の横に並んだ。

しかし蘭はまた何かを考えているようだ。

その様子に、蘭が何を悩んでいるのかに気づいた。

そう。偽名。“江戸川コナン”のような偽名をつけるのを、すっかり忘れていたのだ。

さすがにもろ呼ぶのもおかしいし、だからと言って名無しと言つのもどこか腑に落ちない。

しかしあの時もとっさに後ろの本棚にあった二つの本で決めたように、中々思いつかない。

「分かった、あいりって言つのはどう?」

蘭は目を輝かせて、新一を見ている。

「あいり?」

その名付け元が分からず、新一は思わず聞き返した。

「ほら、アイリーン・アドラーからよ。確か、ホームズが生涯で愛したただ一人の女性だよ?」

「あ、なるほどね」

言葉通り、新一は目をぱちくりさせている。

そして、たまには新一の話も役に立つんだねと呟いていた蘭に、心の中で突っ込みを入れる。直接言っても良かったのだが、どうやらコナンの時の癖が残っているらしかった。

「ほらあいり。せっかく来たんだから、自分で好きなの選んじやいなよ！」

全く躊躇いもせず、蘭はそう呼んだ。

少々間を空けて、あいりこと新一は後をついていった。

店の中に入り、目に入った服を幾つか選び、レジ係に渡す。

会計時に初めて買おうとしている服の値段を知った。

それらが、思っていたよりも張っていたことに二人は驚いて、お互いに目を合わせた。



第六話・いざ、ショッピングモールへ！（後書き）

この話から舞台？になるショッピングモールのモデルは、私が住んでいる市内にあるインです（笑）

## 第七話：ランチタイム・その1

そんなこんなで蘭に振り回され、新一が気づいたときにはあつという間に正午を過ぎていた。

両手に持っていたショップバッグが、その振り回されっぷりを象徴していた。

本来ここへ来た目的は新一の中ではとつくに達成されていたので、蘭に、そろそろ帰ろうと言った。しかし、蘭はそれを聞き入れなかった。

半分しうがなくあきらめると、次は喫茶店へと行くことになってしまった。

蘭いわく、いったんお昼ご飯を食べようと。

それを聞かされて、思わずため息をついた新一に、蘭が一言付け加えた。

「わたしをずっと待たせてたんだから、これ位のわがままは聞いてね？」

蘭は冗談で言ったのだが、新一はそれに負い目を感じてうなずいた。

混み合っていた喫茶店に何とか入って席に着き、メニューを見ていた。

新一はそれからちよつとだけ顔をのぞかせて、正面に座っている蘭

をちらつと見た。

メニューを両手で持ちつつ、一つひとつに目を通していった。  
どれを食べようか、おそらく悩んでいるのだろう。

正面からの新一の視線に、蘭はすぐに気がついた。新一がすぐさまメニューに顔を隠すも、蘭はそこから見透かすように新一の顔を隠しているメニューをじっと見つめている。

その視線に新一はすぐ気づいたが、あえてメニューは目の前に立てたまま。

「どうしたの？」

「な、何でも……ないよ」

新一にだが、何も知らない人から見たらメニューに向かって蘭はつぶやいた。

いつもの癖で何でもねーよと答えそうになったのを抑えつつ、新一はメニューで出来上がった壁にもう一度視線を戻した。すると、あるものがちょうど目に入ってきた。

カツサンドセット。カツサンド、サラダ、コーヒーでセットのものだった。

「じゃあ、あたしはカツサンドセットにしよう」と

誰に聞いてもらいたいわけでもなく、自分に言い聞かせるのでもな

くメニューの壁に向かってぽつりとつぶやいた。

その言葉は、言った本人は周りの雑音に消された気がした。

新一は微妙な気まずさを感じつつも、メニューを自分の顔の前からどかし、テーブルの端にさりげなく置いた。

周りは皆、それぞれの話に華を咲かせているようだったが、新一と蘭の座っている席だけは沈黙に包まれていたのだ。

その中でどのいづらさを誰かが自分にごまかすように、お絞りを手に取り袋から取り出した。

「じゃあ、わたしもそれにしようかな」

ちよつとの間が開いて、蘭がそう言いメニューを静かに閉じた。そしてさっきの新一と同じように、お絞りを袋から取り出して手を拭き始めた。

「もしかして蘭、何かいいことでもあった？」

「え？」

新一には、今の蘭の表情がどこか嬉しそうに見えたのだ。今までの沈黙での気まずさからして、なぜかと思わず聞いた。ちよつとだけ考え込んでから、蘭はお絞りを袋の上に置いた。

「だって、今日はしんい、じゃなくて、あいりと久しぶりに出かけ

られたんだもん。それに、朝のあれがすごく嬉しかったの」

「あれ、ね」

”あれ”と言われて、新一にはすぐに何のことか分かった。

博士も言っただけ、小さくされちまった時からずっと決めてたんだよ。オメーをあいつらから絶対に守るって。オメーのこと、一番大切にしたいって思ってたから

新一が蘭と”再会”した時に言った言葉のことである。

蘭が嬉しいと言ってくれるのはまあ悪くないのだが、実際あまり触れて欲しくなかった。

言おうと思って言ったのではなく、自分の口から勝手に流れ出るように喋ったことだったから。もちろん、言ったことを後悔しているわけではない。

むしろ、伝えなかったとも言える。今になってよくよく考えてみると、結構告白めいたことを言ったから自分が一番驚いているのだ。

そんな時、いいタイミングなのか悪いタイミングなのか従業員が新一と蘭の座っている席にやってきた。

注文はお決まりですか、と聞かれて新一のほうがかツサンドを二つ、と頼んだ。

従業員はそれをメモし、二人に確認してからナイフとフォークを２セットずつ置いていった。

「ちょっと、トイレ行って来るね」

従業員が去っていった後、蘭がテーブルから身を乗り出していった。新一は、当然だがそれにうなづく。そもそも、行くなどは普通言わないだろう。

立ち上がった蘭に、新一が座ったまま声をかける。

「一人で大丈夫かよ？」

「うん。すぐ近くにあるみたいだし、迷わないって。遅かったら、先に食べちゃっていいから」

蘭はどうやら、迷わないのかと新一が心配しているものだったと思ったようだ。

しかし、当の本人である新一はそうは思っていないかった。また別の理由で、過剰かとも一瞬考えたが、心配しているのだ。

「あ、ちょっと」

しかし蘭は、引き止める間もなくいそいそと店を出て行った。

その蘭の後姿を見送っている時、携帯がブルブルと震えた。

ポケットから取り出してみると、どうやらメールが来ていると分かった。

その差出人は、哀だった。

『デートの最中にごめんなさいね。とりあえず例の材料が見つかったから、今週末あたりまでには何とかなりそうよ。それまでは、まあ、めったに出来ない貴重な体験だから楽しんできてね』

（最初と最後の文はいらねーだろ。何考えてんだ、あの女）

携帯に向かって苦笑してから、それを閉じてポケットにしまいこんだ。

しかし、真ん中の本当に重要な文にはほっと心をなでおろした。

## 第七話：ランチタイム・その1（後書き）

前の更新からだいぶ日が開いちゃったんで、今日は2話投稿します！  
ただ今都神は珍しく忙しい時期なので、次々回（と言うのか？）の  
更新も遅くなっちゃうかもしれないです。そうなってしまっても、  
悪しからず・・・出来るだけ早く更新できるよう、努力します。



## 第八話：ランチタイム・その2

「お待たせしました、カツサンドセットです」

「あ、はい」

新一が思っていたよりも早く、食事が運ばれてきた。

デザートでもないのにわざわざ「後にして下さい」とは言いづらかったので、

思わず空返事で返した。従業員は新一の前、そして蘭の座っていた席の前にトレイを置いた。

トレイの上には、見るからに作りたてのカツサンド、作り置きしてありそうなサラダ、そして淹れたてであるコーヒーの入った白いカップ。値段（三五〇円）の割には、高級そうというよりも、安さを感じさせないようなものだった。

従業員は、最後にオーダーをメモした紙を透明の筒に入れた。

「では、ごゆっくりどうぞ」

そして、こう言い残して去っていった。

その従業員の後を目で見送っていると、どうやら本格的に混雑してきたらしいと分かった。

新一たちがここに入っただのは正午過ぎだったが、その時よりも並ん

でいる人が増えた気がする。

新一のいる席は、ちょうど彼らからは見えない、しかしこつちからだと彼らの姿がよく見える席だったのだ。

それから周りに視線を泳がすと、周りに座っていた人々の顔も変わり始めていた。席を立ち、会計を済ませようとする人の姿がやけに目に付く。

蘭はまだ戻ってきていないものの、新一はコーヒーを一口だけ飲んだ。

「熱っ」

その熱さに、思わずカップを口から離した。

いつもは小説を読みつつ飲むのだが、自分の淹れたコーヒーの存在を忘れていたこともあるので、温い（ぬるい）のばかりだった。熱いコーヒーは、本当に久しぶりだった。

熱さはともかく、味は甘さ控えめで新一の好みそのものだった。

（遅えな、蘭のやつ）

蘭がトイレに立ってから、早三十分が経っていた。

周りにいた客はいつの間にか全て入れ替わり、それぞれに食事を楽しんでいた。

幸か不幸か、店側や並んでいる客たちに自分がサンドに手をつけずに居候状態になっていることはばれていないらしい。

もしそうなら、いと白い目で見られていたことだろう。  
新一は、ここに来て初めて混雑していることに感謝した。

さっきまで熱々だったコーヒ―は、いつも自分が飲んでいたコーヒ―のように温くなってしまった。

さすがに不安になった新一が席を立とうとした時に、店の入り口に蘭の姿が見えた。

新一は、立ち上がりかけていた体を椅子に戻す。

「ごめん、遅くなっちゃって。最初に行こうとしたトイレが混んでね。わたしはそんなに急いでなかったから、三階のトイレに行ったのよ。そこまではよかったんだけど」

「迷ったんだ？」

「まあ、そう言うことだけど」

席についた蘭に、思わずちよっかいを出す。

まあ、ただでさえでかくて造り立てで人の多いショッピングモールその上方向音痴の蘭とくるから、これは三〇分迷ってもしょうがない。

「そういえば、四階、どうしてか分からないけど、関係者以外立ち入り禁止になってたよ？」

「ああ、それなら」

このショッピングモール、四階建てとしてオープンするはずが、オープン前日に4階だけが欠陥工事と分かったと新一はテレビで聞いていた。  
どうやら階ごとに内装業者が違っていたせいとも言われているらしい。

その新一の説明を聞いて、蘭は「そういえば、どこの階にも4階は諸事情により立ち入り禁止ですって書いてあったわね」と納得したようだった。蘭の言うとおり、店内のエスカレーターの乗降口にはその張り紙がしてあった。

「じゃ、食べる？」

すっかり不安が消し飛んで、新一は笑いながら言った。

「うん！」

蘭の声に新一は、軽く合掌していただきます、と小声で言う。

どっちかというと洋食処のこの場に似合わないとは分かっていたが、思わず蘭もそれに習った。

フォークで押さえながら、厚みのあるサンドをナイフで切り分ける。そして、大元から離れたサンドを口へと運んだ。

「すごくおいしい」

蘭は感激して、もう一度サンドにナイフとフォークを持っていった。その蘭のほころんだ顔にちょっとドキツとしつつも、新一も一口。

「待った甲斐があつたよね」

自分の思っていたことを悟られないよう、蘭に同意した。

悟られないよう、とはいえ、同意したのは本心からだった。

蘭の言うとおり、感激するほどおいしいと言つても過言ではないかもしれない。

それより、失敗したと思つたのは語尾の修正だった。”よね”の部分だけ音を高くしすぎて、イタイ話し方になった気もする。

それを何気なくごまかすかのように、コーヒーをもう一口すすつた。

それから二人は、他愛ない話で盛り上がった。

クラスメイトの話、学校の先生の話と、なるべく女の子らしい話題で。

本当はホームズや推理の話をしたところだったが、念のためにやめておいた。

楽しげに話す蘭の気分を損ねたくないと言つのもあった。

「おいしかったね」

ものすごく満足げな顔で同意を求める蘭に、新一はうなずく。  
その笑顔に、両手に持つ荷物の重さが少しだけ軽くなった気がした。

「また、来たいよね」

付け加えて、蘭は静かに言った。

（今度は”新一”と）

（今度は”新一”の姿でな）

心の中だけで、蘭の言葉の続きをお互い心の中でつぶやいた。  
お互いがお互い同じことを思っているとも思わず、二人の間は何となく沈黙に。

「じゃあ、そろそろ帰る？ もう、二時だし。ごめんね、長居しちゃって」

「ああ、別に平気」

空間の空白を埋めるように言った蘭の言葉は、騒がしい中に妙に響いた。

突然話しかけられて、微妙に新一の口調は元に戻りかけた。

しかし修正するほどでもなかったので、新一はそのままにした。

二人が食事した喫茶店は、家に戻るための出口からは吹き抜けを横切らないと行けないほど離れていた。

そして二人は、ショッピングモールの出口に向かって歩いていく。

それと同時刻、欠陥工事で入れないはずの四階で、二人の男が言い争いをしていた。





## 第八話：ランチタイム・その2（後書き）

4月7日投稿、2話目です。

こんなに早くUPしたら、手抜きって言われても仕方ないですかね・  
・。でもこの小説、m y p cに保存してあるヤツをちょいといと編集して投稿しているの、やる気になればそんなに時間は掛かないんですよ。ちなみに並行して連載している『海』だと、また事情が変わってくるんですけれども・・。

4階が欠陥工事で使えないってネタは、これからの話の中で一応必要になってきます。

何故使えないのかってことで階ごとに担当する内装業者が違々と書きましたが、このネタに関する突っ込みは勘弁してください（><;

）

## 第九話：事件発生（前書き）

今回から、話の展開上オリキャラが何人か出てきます。（今回の話には一応一人だけです）

原作の登場人物以外が出るのは嫌！等思われる方はご注意ください。

## 第九話：事件発生

（ふう、やっと帰れるな）

心の中でため息をつきながら、蘭の横を歩いていく。

そんな二人に、出口が見えてくる。

まだまだたくさんの人が、この中へと入ってくる。

そんな彼らの姿を、新一は信じられないと思いつつ見た。

昼食を食べて少しは元気を取り戻したが、まだ少し疲れが残っている。

あっちへうろつろ、こっちへうろつろ。

それでもまだ普通に歩いている蘭のことにも不思議に思えてきた。

出口に向かって、吹き抜けを通り抜ける。

そこからは二階、三階、そして、工事中の四階にも人の姿が見えた。

（四階って工事してるんじゃないか？ たっけ？）

不思議に思っ、新一は静かに足を止めた。

そして上を見上げて、四階の人影に焦点を合わせる。

二人のスーツを着ている男性。顔は良く分からないが、どうやら何かの言い争いをしているように見えた。  
ただ話しているのではなく、片方の人が激しい身振り手振りをして  
いたのだ。

上を見上げている新一に気づいて、蘭もその視線の先を追った。

その時。

激しい身振り手振りをしていた男性が、もう片方の男性を突き飛ばした。

突き飛ばされた男性は、一階のフロアに向かって落ちてくる。

おそらく落下地点になるところには、ちょうど蘭がいた。

それに気づき、新一は頭が働く前に蘭の元へ駆け出していた。  
ようするに、新一の本能が先に働いたのだ。

「危ない！」

そして、蘭の腕を思い切り引き、出来る限り早く走り出す。

その直後に、男性の体はフロアに叩きつけられた。

頭から落ちたせいで、首が変な方向に曲がってしまっている。

新一はそれを蘭の目に触れさせぬよう、さりげなく蘭を自分の後ろ

にやった。

「蘭、警察と救急車を呼んでくれ！」

（救急車と言っても、ほとんど望みは無いけど）

そして、顔だけ振り向いて蘭に叫んだ。

蘭はこくりとうなずき、バッグから携帯電話を取り出す。

蘭の後ろにいる客たちは、何事かと周りに集まってきている。

目を伏せるものもいれば、叫ぶものもいた。

その客たちの間を縫って、店員がやってきた。

「何があつたんですか！」

「事情は後で話します！ それより、早く店の出入り口と駐車場、この敷地の出入り口を全て封鎖するように言って下さい」

犯人は、四階にいた被害者の男と言い争っていたスーツ姿の男性。四階の上には屋上の駐車場があるため、急がないと逃げられる可能性がある。

もし屋上に車を止めて無くても、四階から一階へ行けば逃げられてしまう。

犯人を逃がさないために、新一は叫んだ。

「あ、はい！」

店員は新一の勢いに押されて、急いで駆けて行った。

「おお、蘭君もここに来ていたのか」

「目暮警部！」

数分経ってから現場にやってきたのは、目暮だった。

彼とともにやってきた救急隊員たちが、被害者の元に駆け寄る。

首に手を当ててみるが、どうやらすでに死亡していたらしい。

首を横に振って見せた。

彼らの後ろには、鑑識の人々の姿も見えた。

「そうですか。身分を証明するようなものがあつたら、すぐに言って下さい。よろしく願います」

救急隊員のしぐさに、流れで新一はそう鑑識の人々に言った。

そう言われた鑑識の人々は、何の疑いもなしに作業へ取り掛かった。

新一は、自分自身の今の状況を、ほとんど忘れてしまっていたのだ。今は”高校生探偵・工藤新一”ではなく、ただの女子高生ということ。

それに気づき、蘭が新一の肩をぽんぽんと叩いた。

その蘭に新一は状況を思い出し、はっと我に返った。  
恐る恐る、二人で目暮を見る。

救急隊員と違って、新一を不思議そうに見つめている。

「この子、新一の同い年の従姉妹であいりって言うんです。新一と昔から仲が良くて、彼女も高校生探偵なんですよ！ まだ駆け出しみたいですけど、結構頭が切れて」

「おお、そうだったのか。どうりで工藤君と似ていると思ったよ」

蘭の言葉に納得して、目暮は悪気も無くそう言った。

新一と蘭は、目暮の言葉に何とか笑みで返した。

そもそも新一の女バージョンなのだから、似ていて当然。  
危なかった、と内心ほっとしていた。

しかしここで起こっていることを思い出し、すぐに心を切り替えた。

「警部、被害者の内ポケットの中から免許証が」

そんな中、鑑識の人のうちの一人がやってきた。  
目暮はそれを受け取り、記載されている名前を読み上げた。

「戸田恵介。一九七五年十月二日生まれ、三三歳か。じゃあ、身元確認にまわしてくれ」

そして、免許証を持ってきた鑑識の人に渡した。



## 第九話：事件発生（後書き）

戸田恵介の誕生日（一九七五年）は、今年の二〇〇七年から計算して三二歳とされています。原作ではほとんど月日が経過しているので違和感を感じられるかもしれませんが、そのあたりはご了承ください  
い m (——) m

## 第十話：調査開始！

「戸田さんが亡くなったって本当ですか？」

そんな中、3人のスーツ姿の男たちが人ごみを縫って走ってきた。息を荒げて、目暮に視線を向けている。

そのときはすでに、戸田は担架で運ばれている途中だった。布にすっぽりと包まれ、救急隊員二人とそこから離れようとしていたのだ。

その二人に、彼らは駆け寄っていった。目暮の制止を振り切って。

「戸田さんっ！」

「あなたたちは、戸田さんの知り合いですか？」

刑事たちに体を抑えられ、戸田を見送ることしか出来なかった三人に新一が話しかけた。

その声を聞きとり、三人は多少落ち着いて振り返った。

彼らを止めていた刑事たちも、力をふつと抜いていた。

その場は、新一の声で一瞬にして静かになったのだ。

それに驚いているのかどうかは分からないが、三人それぞれが不思議そうな顔をして

新一のほうをじっとみている。荒くなった呼吸を、整えつつ。

新一はそんな彼らの表情を、一人ひとりじっと見ていた。

「ああ、そうだが」

三人のうちの一人が、そう言いつつ新一に歩み寄ってきた。

新一のことを「何だこの子」的な目線で見ているものの、どこも怪しい素振りは無い。今のところだが。

まだ分らない。この三人が、シロだとかクロだとか。

突き飛ばされた現場は見たものの、色々と、話を聞いてみなくては何も始まらないだろう。

「名前と年齢、それから、今日あったことを話してくれませんか。ここに来ている理由とかを」

新一が静かにそう言うと、三人は互いに目配せをした。それから、歩み寄ってきた男が始めに口を開いた。

「俺は、麻井秦太。歳は二八歳だ。俺たちと戸田さんは、この近くの会社に勤めててな。今日はここで昼飯を食いに行こうって事になって、昼の一時頃に来たんだ」

多少戸惑いつつも、落ち着きを取り戻して麻井はそう話した。

（一時、か）

「じゃあ次に、向かって左側の方」

新一に呼ばれて、その人は麻井の隣まで静かに歩いてきた。

「俺は鴨川和哉。歳は、麻井さんの二つ下で二六歳つす。麻井さんの言う通り、今日は昼飯目当てでここに来たんすよ。美味しい店がこの三階にあるって戸田先輩から聞いたんで。でも俺たち、その店には入らなかつたんですよね」

しょんぼりとしながら、そう寂しそうに言った。  
そんな彼の言葉の最後の一行が、新一の頭に引っかけた。

「どうしてですか？」

間髪入れずに聞くと、鴨川が静かに答えた。

「ここに着いてから、店を見つけたのまでは良かったんですけど、そこから一旦全員が全員ばらばらの、別行動をしたんですよ。俺は取引先から連絡があつて、ちょっとその場を離れて電話をしてたんです。大分時間がかかつちゃつて、やっと戻ってきたら誰もいなかったんです。携帯にかけても、皆電源が切つてあつたから連絡つかなくて。ちょっとしたら、佐竹さん、麻井さんの順に戻ってきて

だけど、戸田先輩は姿を見せなかったんです。戸田先輩を待つてたら、店の前には、少し離れた所にこの吹き抜けがあったんですけど、何だか下が騒がしくなってきたから、思わず覗き込んだら」

「たくさんの人ごみの中に空洞が出来ていて、そこに人が倒れていたらってわけだ。まあ俺は、眼鏡を忘れたから誰かが倒れているとしか分からなかったが。おっと、自己紹介が遅れた。佐竹守、麻井と同期の二八歳だ」

鴨川の言葉を遮り、佐竹が静かに話した。

新一は彼の言葉を、一応常に持ち歩いているメモ用紙に記した。三人の簡単なプロフィールと、事件時の状況を簡単に。その後ろで、目暮も同じことをしている。

「鴨川さん以外の方の、麻井さんと佐竹さんは、何をしていたんですか？」

新一に聞かれ、先に麻井が答えた。

「俺は、腹の調子が悪かったからしばらく店からちょっと離れたトイレに行っていたぞ。あの店の近くには、ちょうどトイレが無かったから」

「俺は他のやつらが別々にどこか行っただから、店と同じ階の三階をブラブラしていた。ここに来るのは初めてだったから、暇つぶしだな。店の前にいても面白くないし。戸田さんは店の前にいると言っ

ていたが、俺がもう一度店の前を通つたらいなくなっていた。それで、何となく吹き抜けを見たら」

そう言つて佐竹は、上を静かに見上げた。思わず新一も、その目線の先を追う。

「戸田さんが、誰かに突き飛ばされたのを見たんだよ」

「！」

冷静そうな表情であつたが、佐竹の声は震えていた。

その言葉を聞き、麻井と鴨川は目を見開いていた。

佐竹は、言葉を続ける。

「麻井や鴨川に、落ちているのは戸田さんだと言われたから初めて気づいたんだ。被害者は、戸田さんだつて。それで俺も気が動転して、警察や救急車を呼ぶよりも先に下へ向かうことしか考えていなかったんだ。でも野次馬たちのせいで、下に向かうまで時間がかかつちまつたけどな」

そう言い終えてから、三人は目暮に呼ばれて新一の横を通り過ぎていった。

どうやら、一応逃げられてしまったときのために店内の別室で詳しく話を聞けらしい。

三人全員が新一の横を通り過ぎた後、後ろに振り向いて新一はある一人に視線を合わせた。

（大体犯人の目星はついたけど、証拠がまだまだ足りない。どうせ今彼らに付いていっても、時間の無駄になるだろうな。あとで目暮警部から色々聞けば済むことだし。百聞は一見にしかず。まずは、現場に行ってみるとすつか！）

「これから現場を見に行くんでしょ？ 探偵さん」

「え？」

そんな中、急に後ろから蘭に耳打ちされた。  
人ごみに消えた彼らから視線を戻して、体ごと蘭に振り向いた。

「まあ……そうだけど」

「今は、新一は女の子なんだからあんまり一人でうろろしない方がいいと思うよ」

「オメーこそ女じゃねーか」

「わたしはいいの！ とにかく、新一は一人でいちゃ危ないと思うの。わたしも一緒についてく」

「まあ、好きにしろよ」

いざというときには、空手技を出して新一を守る！ と言つのもあるが、実際は一人でいると危ないと思つたのもあつた。

蘭は新一の隣に並んで、一緒に現場へとついていった。



## 第十話：調査開始！（後書き）

一ヶ月かかって、やっと十話に突入です・・・（汗）本当に、中々更新できなくてごめんなさい><

## 第十一話：近づいてくる危険な影……

エレベーターは、三階までで止まるようになっていたらしい。

「四階」部分のボタンは、透明なカバーで覆われていた。とりあえず三階まで行き、そこから階段で上っていった。

「ここから先は入ってはいけません」という看板があつたが、普通に無視して。

新一と違つてこのようなことに慣れていない蘭は、多少躊躇つたが、どンドン先へ進んでいく新一を追いかけて、柵をどかして階段を上がつた。

「あれ、ここつて工事してるはずよね？」

「休みなのかもな」

二人の目の前には、ただ真っ白な空間が広がるばかり。

何となくシヨップとシヨップを分ける壁みたいなものや、柱は見えた。

しかしそれ以外には何も置いていない上、色も全く施されていない。壁紙の残骸みたいなものは、いくつも散らばっているが。

真下の階とは、造りは同じなのに、全く違う空気が流れていた。

その中に、戸田が突き落とされたとされる吹き抜けがあつた。

まだ警察に「ここ」から突き落とされた」とは言っていないため、黄色のテープが巻かれているでもなく、手すりのついたガラスの壁があるだけ。

そこから下を覗き込むと、鑑識課の人たちと周りの野次馬が見えた。

彼らを見ながら、今の自分の中の考えを整理する。

（戸田さんは、四人全員が別行動している時に三人の中の誰かに呼び出されたんだ。この、ちょうど工事をやっていない四階に、何らかの理由をつけて。一旦他の人たちと別れてから、もう一度店の前に戻ってきて。でも、この辺りには証拠が無いな。もしかしたら指紋がついてるかもしれないけど。やっぱり、下にいる人たちを呼んできたほうがいいよな）

「なあ蘭、ちょっと頼んでもいいか？」

「え？ 良いけど」

頼みごとの概要を言い終えると、蘭はこくりとうなずいた。

それから歩き出し、何故か数歩歩いてからピタリと立ち止まった。

そして、

「新一は行かないの？」

「ああ。一応だけど、ここに誰もいない間に犯人が証拠の隠滅を図るかも知れねーだろ？ 見張り役って訳。ホラ、今回の事件のことも色々と整理したいし」

「うん、じゃあ行つて来るね！」

もう一度うなずいて、蘭は急いで駆け出した。

新一を一人にしておくのも、危ないことと思っていたから。

中身は男とはいえ、見た目は女子高生。体力や腕力もきつと衰えて  
いるだろうと。

もうちょっとで、蘭は3階に行く階段に着きそうだ。

そんな時に、

「蘭！」

新一が言い忘れたことを思い出して、蘭に向かって叫んだ。  
後ろから叫び声が聞こえて、蘭はぱつと振り返った。

「なーにー？」

両手を口の横に当て、もう小さくなっていた人影に向かって。

「誰かに見られてるとか、嫌な気配がしたらオレの携帯にすぐかけ  
ろよ！ 分かったか」

小さな影に”新一”の面影を感じて、蘭も同様に叫び返した。

「あいりも、何かあったらすぐに連絡してね！絶対に危険なことしちゃダメだよ」

良くは見えなかったが、新一がうなずいたように見えた。

蘭は体を前に戻して、階段を下りていく。蘭の姿は、段々と見えなくなる。

新一はもう一度吹き抜けに体を戻し、思考にふけった。

そのころ、一階では、ある騒ぎが起こっていた。

吹き抜けに立っている新一でも、それに気づく由は無かった。

後ろから、ある人物が近づいてきていることにも。

「！」

気づいた時には、すでに遅かった。

首の後ろに大きな衝撃を受け、体がぐらりとよろめく。

誰かに殴られたと確信し、何とか後ろを振り向こうとした。

しかし、後ろの誰かの顔を確認する前に新一の目の前は真っ暗になった。

「え、あの人が？」

そのころ、一階。

鑑識課の人に四階の話をした後、取調べを終えた目暮に話しかけた。その目暮に蘭は、「騒ぎ」の話を”あいり”に伝えるよう言われた。取調べを終えた後、戸田の会社の後輩らのうちの一人が姿を消したのだと言う。

その人の名前を聞いて、蘭は嫌な胸騒ぎを覚えた。全速力で走りながら、携帯をバッグから取り出す。

急いで新一の携帯にかけた。しかし、電源が切られているようだ。

エレベーターに乗り、三階のボタンを押す。

鼓動がだんだんと速くなってくる。

（お願い、新一……無事でいて！）

エレベーターが、三階に到着した。



第十一話：近づいてくる危険な影……（後書き）

やーーーーっと更新できました!!

約2週間ぶりです（汗汗）

お待たせして、申し訳ございませんでした……



## 第十二話：犯人の正体

電動ドアが開いたのと同時に、蘭はフロアに飛び出した。

エレベーターを待っていた人がその勢いに驚いて、一瞬体がよろめいた。

それに一瞬立ち止まり振り返ったものの、その人は大丈夫だろうと判断してまた駆けていった。

エレベーターから四階につながる階段までは、そんなに遠くは無かった。

むしろ近かった。エレベーターを降りると、そこから階段が見えるくらい。

立ち入りを禁じている柵を急いでどかし、階段を一目散に駆け上がった。

息が上がってきたので、手すりに手を添えつつ。

そしてやっと階段を上がりきり、四階の真っ白なフロアが目に入る。まだ店舗ごとの仕切りも無いため、全部見渡せた。

真っ白なんだから、少しでも別の色があれば分かるはず。

しかし、その場所から、白以外の色は全く見えなかった。

息を整えながら、携帯をバッグから取り出す。

そして何度も掛け慣れた番号を、焦る指でプッシュする。

ゴホゴホと咳き込みつつ、携帯を耳に焦っていた所為か乱暴に当たった。

『はい、工藤新一です。ご用件の方は……』

聞こえてくるのは、”工藤新一”の機械的なメッセージだけ。力が抜けた手は、通話を断つことなくだらりとそのまま下がった。下の階で起こった”騒動”と、今の四階での状況がつながる。

犯人は、きっと真相が分かったであろう彼女を誘拐した。そして口止めするために、どこかで。

頭の中には、自分に向かって叫んでいた新一の姿。

頬には、目から静かに一筋の涙が伝う感触。

”あいり”に色々と問い詰めていた時には、抑えることが出来たのに。

抑えようと思っけていても、抑えることが出来ない。

（わたしが、新一を独りにしたからだ。あの時、新一を独りにしちやいけなかったのに、守るって思っけてたのに、これじゃただの足手まといじゃない）

その場に立ち尽くして、しばらく涙をこぼし続けていた。

自分の行動を後悔していると、余計に涙が零れてくる。  
その感情を、何とか自分の中から消し去ろうと試みた。  
くすん、と鼻をすすり、携帯を持ってない手でやつと目をこすった。

（泣いてる場合じゃない。目暮警部たちにすぐ知らせなきゃ。確かここは、事件からずっと店は閉鎖されてる。犯人も新一も、絶対この中のどこかにいるはずだもの。それに、口止めするならすぐに殺しちゃえばいいのに、わざわざ誘拐してるから）

とにかく、わたしがすぐに動かなきゃダメ！！

そう思うと、力が抜けていた体を動かすことが出来た。  
携帯をバッグにしまい、再度階段に向かって駆け出した。

（待っててね新一。絶対助けるから！）

一方、ここは四階の店舗スペース裏の倉庫。  
商品の在庫を置いておいたりする場所だ。  
鉄の扉には、しっかりと鍵が閉められている。

コンクリートむき出しの壁、設置されたばかりの柱。

その中でも一番太い柱の根元に、気を失っている新一ことあいの姿があった。

両手をロープで固定され、そのロープが更に後ろの柱に結わえ付けられていた。

そのあいが、静かに意識を取り戻した。

（<sup>いて</sup>痛え）

犯人らしき人物に殴られた首筋に、まだ鈍い痛みが残っていた。

徐々にはつきりしてくる景色を、ゆつくりと見渡した。

四階の在庫をすべてしまうのか、滅茶苦茶広いところだった。

この時のあいりには、今自分がどの階のどこにいるのかは分からなかった。

（ここは、どこだ？）

そんなことを思っていると、あいが監禁されている部屋の奥からある人が出てきた。

革靴の音が、広い室内に大きく響き渡る。

あいが意識を取り戻したことに気づき、あいりに向かって歩いてきた。

その顔はどこか複雑そうな気持ちを抱えているように見えた。

そして、あいのメートル前で立ち止まった。

（やっぱり、この人だったのか）

その人とは、戸田が落ちてくるのを見たと言っていた佐竹だった。しかも、彼は後ろ手に持っていたあるものを静かに取り出した。おそらく、店内のどこから万引きしたであろう包丁だった。値札が張ってあるのが、一瞬目に入った。

「もう、全部分かってるんだろ？」

それだけあいりに言った。

あいりは、ポーカーフェイスを崩さずに佐竹の姿を見上げていた。

（蘭）

（えっ？）

それと同時刻、目暮の元に向かう蘭に一瞬新一の声が聞こえた気がした。

（新一……？）



## 第十二話：犯人の正体（後書き）

2週間＋1日ぶりの更新です。

他の連載を始めた頃、こつちも更新されていると思われた方がいらつしやったのか読者数がいつもより多かったです（多分違うとは思いますが）。

待たせて済まない気持ちもありますが、待っていて下さる方がいることもすごく嬉しいです。

この場を借りて、感謝します（\*^^\*）

堅苦しい文体には慣れてないんで、どこか違和感があるかもしれませんが……と言っわけで、ここで十二話の話をちよつとします。

（何）

ここでのポイントは、佐竹が何故包丁を持っているのか？と言うことです。ポイントと言うのは……ポイントというか、事件に関わってくるって言う暗示（？）みたいなものだからです。

値札がついているってことは、自分が予め用意していたわけではない……と言うことは？？

ここから先はネタバレになるので言いません……

とにかく、次回の更新を楽しみにしててくださいね  
（いつになるかは分かりませんが……汗）

### 第十三話：見つける〜蘭side〜（前書き）

第十三話は、その時の彼らの様子をちゃんと読者さんに伝えるために新sideと蘭sideに分かれています。で、今回の更新はまず蘭sideです。誘拐された新<sup>あいり</sup>を探す蘭の様子をとくご覧あれ。（笑）



### 第十三話：見つける〜蘭side〜

急いで階段を駆け降りて、蘭は現場にいた目暮警部に手短に伝えた。あいりが、姿を消した佐竹に誘拐されたことを。それを聞き終えた目暮警部は、周りの刑事らに指示を出した。

現場に残る人、一階を探す人、二階を探す人、三階を探す人。四階に関しては、蘭が自ら名乗り出た。それに目暮警部は驚いた。

「だめだ。一般人の君を巻き込むわけにはいかない。ただでさえ君はあいり君と仲が良いから、犯人に狙われるかもしれない。だから、ここで待っていてくれ」

そう言って、四階の担当を決めた。しかし蘭は引かず、

「あいりがいなくなったのは、わたしのせいなんです。だから、ここで待つてただけなんて嫌です」

「君のせいじゃなくて、悪いのは犯人だ。危ないから、ここで待つていなさい」

目暮警部の強い物言いに、蘭は何も言い返せなくなった。それで蘭が自分の言葉を分かってくれたのと思ったのか、あいりを探しに出た刑事らの後を追っていった。

あいりに繋がらない携帯を見ながら、蘭はきゅっと口を結んだ。  
この今の瞬間、あいりは無事なのだろうか。それとも。  
嫌なことばかりが、頭の中を駆け巡っていく。

（確かに迷惑かもしれない。でも、やっぱりわたしは、新一が辛い  
思いしてるのに黙って待つてただけなんて嫌！）

警察の人に迷惑なのは十分分かっている。だけど。

気付いたときには、その場から走ってエレベーターに向かっていた。

「あ、ちよつと！」

後ろから、現場を見張る刑事の内の一人が追いかけてきた。それに  
構わず、閉じかけたエレベーターに飛び込んだ。

その勢いに、中にいた買い物客が皆真ん丸な目。刑事は、あと一歩  
と言うところで電動扉に阻まれた。三階のボタンを押して、はあは  
あと息を整える。そんなことをしていたら、すぐに目的地の一步手  
前に到着した。

エレベーターを降り、四階に続く階段に向かってまた走る。

蘭には、きつとあいりは四階にいるだろうと言う直感があった。さ  
つきは責任を強く感じてとにかく目暮警部に伝えなければ、と思っ  
ていた。

しかし、一階に降りたときには多少他のことを考えられるようにな  
っていた。

（あირიは、わたしを待つてたんだからあの場所から動いたとは考えられない。多分、そこで犯人に連れ去られた。例えば監禁するために氣絶させたとしたら、あირიを背負ったりしなきゃだね。あんなにお客さんがいる中で、氣を失つてる人と一緒にいたら目立つ氣絶させないで脅してどこかに連れていこうとしても、ただの会社員の佐竹さんには店の裏とかには入れない。一番誘拐した人を置いておくことに適してるのは）

今蘭が辿り着いた、四階。ここしかないはず。

階段からフロアへと出る。相変わらず、そこだけが静かな空氣が流れていた。  
吹き抜けから、下のフロアで買い物が話をしている声だけが聞こえてくる。

（新一、どこなの？）

ゆつくりと歩み出す。店舗予定地の裏を見ながら。  
どこか、隠れられるような場所はないだろうか。  
開けられそうなところは全て開けた。クローゼットみたいなところも。

南北に伸びるショッピングセンター全体の建物の半分くらいを過ぎたところ、変なところを見つけた。ちゃんと白い壁。

しかし、それがめくれていたのだ。恐る恐るそれを外すと、裏から鉄の扉が現れた。

（ここだ。きっと、新一はここにいる！）

片足を後ろに下げ、空手の構えをとった。息を静かに整え、目を閉じて精神統一をする。

「ハアアア……」

そして、目を開けると、引いた足で勢い良く蹴りを放った

「ら、ん」

「えっ？」

蹴りが扉に直撃する手前で、扉の向こうからかすかにあいりの声が聞こえた。

蘭は足を下ろし、扉に耳を当てた。

「警部と救急車、呼んでくれ」

と聞こえた。

「分かった」

とりあえずあいり 新一 は無事だと言うことが分かり、蘭は  
落ち着いた態度でまず救急車を呼ぶために携帯を取り出した。  
しかしそこで、何故救急車を呼ぶのかと言う疑問が出てきた。

かすかに聞こえるあいりの声。

まさか、あいりが危ない状態なんじゃ。

でも今は、それを聞くんじゃない電話することが最優先だ。  
携帯で、番号を押す。

### 第十三話：見つける〜蘭side〜（後書き）

新一の居場所を見つけた蘭。さて、蘭が探し回っていた間の新一はどんな感じになっていたんでしょうか？次回の更新までお待ちください。

#### 第十四話：見つける〜新 side〜

「もう、全部分かってるんだろ？」

「ああ」

あいりの口調から”新一”に戻して、そう静かに切り出す。

一瞬眉がぴくりと動いた佐竹の顔から、視線を外さずに。

佐竹が、怯<sup>ひる</sup>まない自分に戸惑った。しかしそれを知られまいと、顔には出ないようにした。あいりは、その眉の動きからアバウトに推理した。

犯人の微妙な心の動きは、今までの経験の豊富さからやけに感じ取れるのだ。  
ポーカーフェイスを装う犯人でも、推理を話していく内に段々表情が曇るのも。

「あんたを疑い始めたのは、あんたら三人がオレや警部のところへ来た時から。戸田さんとか事件に関する証言をあんたらが警部に話してただろ？」

「ああ。何か変なことでもあるのか？」

佐竹は髪をかきあげて、ふっと自信ありげに鼻で笑った。

「気づかないのか？ あんたらの証言、よく思い出してみろよ」

佐竹を軽く挑発するように、あいりは佐竹に笑顔で返した。  
それが気に入らないようではあるが、あいりの言葉通りその時に遡  
って考えをめぐらせた。

（麻井はトイレへ行っていた。鴨川はメールを打っていた。そして  
俺は、三階の他の店を回っていた）

「俺たちの証言に、変なところなんかないだろう？ つじつまがあ  
ってるじゃないか」

宙からあいりに目を戻して、佐竹はそう言った。  
その顔には、また自信ありげな表情が戻っていた。  
その佐竹を見、あいりは今度は呆れ顔をして、

「バー口、オレが不審に思ったのはアリバイのことじゃねーよ」

と静かに言った。

「え？」とでも言いたそうな顔になって、佐竹は目を丸くした。  
一瞬の間をおいて、あいりは言った。

「あんだ、戸田さんが誰かに突き飛ばされたのを見たって言ったろ  
？」



「それがどうした？」

「誰かが突き飛ばされたのを見て、どうしてあんたは警察を呼ばなかった？　後から戸田さんが落ちたと気づいてから気が動転して下へ向かうことしか考えなかった、ってあんたは言ったよな。普通、人が落ちて来るのを見て落ち着いていられるか」

「そ、それは」

焦っている佐竹に、あいりは更に続ける。

「もう一つ聞く。鴨川さんの証言とあんたの証言を照らし合わせると、矛盾するところがあるんだよ。どうしてあんたには、その倒れている人が戸田さんと分かった？」

「それは、麻井や鴨川が吹き抜けの下に戸田さんが倒れてるって言ったから」

「じゃあその時、麻井さんや鴨川さんはその様子をどんな風に言っただ？」

「だからさっきから言ってるんだろ？　戸田さんが、下に倒れて……」

自分の油断したところに気づいて、佐竹は目を見開いた。  
あいりは彼から目をそらさずに、更に話し続ける。

「そう。麻井さんや鴨川さんには、戸田さんが倒れているってことしか分からなかったんだ。まさか、四階の吹き抜けから突き落とされたとはな。なのにあんたは、戸田さんがどうして死んだか知っていた。それについてよく考えてみると、その時の状況そのものもおかしいんだよ。三階をブラブラしていたあんたは、どうしても一度その店の前を通ったのか。そして、どうしても戸田さんの突き落とされた瞬間に吹き抜けを見たのかってな。そんな丁度いいタイミングに戸田さんの事件が起こった。そんなこと、偶然にしてはおかしすぎるんじゃないか？」

そうあいりが一気に言い終わると、佐竹はふーっとため息を漏らした。

「わかった、認める。オレが戸田さんをつき飛ばしたんだよ」

そして全てあきらめたように、佐竹があいりにむかってそう言った。

「動機は？」

あいりのその言葉に、佐竹は静かに話し始めた。

全ての始まりは、八年前のこと。佐竹が丁度二十歳の時だった。その佐竹の恋人が、ある日突然車にひき逃げされ殺されたのだ。ひき逃げをした犯人は、事件の目撃者によって突き止めることが出来た。

目撃者が、とつさに車のナンバープレートをメモしておいたことがらだった。

犯人が警察に呼ばれ、取調べを受けた際に、犯人はこう言ったという。

『刑事さん。一つ相談なんだが、俺の車が誰かに放火されたんだ。それが誰にやられたのか、調べて欲しいんだよ』

犯人を引き止めつつも、警察は犯人の車の様子を見た。

その車はナンバープレートも確認できないくらいに丸焦げになり、ひき逃げの証拠となる佐竹の恋人の血液も、全く分からなくなってしまうのであった。

それに加え、犯人の家を搜索したものの、ひき逃げに関するものが何も残っていないかった。

そのことから、犯人は証拠不十分ということで釈放された。

それから間もなくして、犯人はどこかへと姿を消した。しかし佐竹は、犯人の顔を忘れまいと心に刻んだ。

そしてつい最近。佐竹の勤める会社に、絶対に忘れないと決めた顔が転勤してきた。

それが戸田だったのだ。まさかこんなところで会うとは、夢にも思っていなかった。

立場的に上であった戸田には、三人の部下が付くことになった。

その三人が、麻井、鴨川そして佐竹である。

そんな戸田の歓迎会をこのショッピングモールで行おうと提案したのが、佐竹だった。

その提案は、八年前の事件のことを戸田がどう思っているのか、聞くチャンスを作ったのだ。

そして事件発生当日に丁度別行動をとることになったところで、戸田を四階まで呼び出し、事件のことを問い詰めた。すると戸田は、ふっと笑って、

『そう言えばそんなこともあったな。お前、あの女の彼氏だったのか。今更俺に、何して欲しいわけ？ 金だったら、いくらでもやるよ』

その言葉に抑えていた怒りや憎しみが爆発し、思わず戸田を突き飛ばしてしまったのだ。

「オレを誘拐して、事件の真相まで言って……これから殺す気か？」

あირიが、悔しそうな顔をしている佐竹に向かって言った。

すると佐竹は、案外落ち着いたように、

「いや、殺しはしないさ。君が俺のやったことを全て知って、俺は自分で犯した罪を隠そうとした。だけど、それじゃあ戸田の奴と同じになるって分かったから。それに……君があいつに殺された、俺の恋人にそっくりだったから。もういいから、って言われている気がしたんだ」

そういい終わると、佐竹は自らの腹を手にとって持っていた包丁で刺した。

「佐竹さん！」

そう叫ぶあいりの顔に、佐竹の血が飛び散る。

佐竹は何度も腹を刺した後、その場にばたりと倒れこんだ。  
彼の手から、血まみれの包丁がするりと抜け落ちる。

「くそっ！」

あいりは舌打ちすると、自由になっている足でその包丁を引き寄せた。

自分の背にある柱にそれをぶつけ、縄でくくられている手首を上手く捻らせ、包丁を手を取った。

その角度を上手く調整して、手首を不自由にしている縄を何とか切った。

そしてポケットから携帯を出した。そこまではよかったが、電池が切れてしまっていた。

とりあえずあいりは誰かに伝えようと、倉庫の扉まで走っていった。

その時、扉の向こうから、蘭の気合いが聞こえてきた。

「やめろ、蹴破るんじゃない……おい、蘭っ！」

その扉が頑丈なのか、大声で叫んだ言葉の最後まで言い終えると気がやんだ。

本当は蹴破ってくれても良かったのだが、蘭にこの現場を見せないためのことだ。

「蘭、警部と救急車を呼んでくれ！」

そうあいりが返すと、扉の向こうから、

「分かった。」と、かすかに声が聞こえた。

それを確認し、佐竹の元へと走る。警部らや救急車が来るまでの、応急処置を施すために。

#### 第十四話：見つけるゝ新side（後書き）

一ヶ月ぶりの更新になります。

これから先（次話）の更新も、これくらい遅れてしまつかもしれない  
せん・・・

## 第十五話：再会・その2

「あいり君、大丈夫かね？」

その声と共に、倉庫の扉が開かれた。

そこから、目暮警部とその部下らの何人かと担架を持ってきた救急隊員が入ってきた。

救急隊員らだけが、新一の横を通り抜けて佐竹の元に走る。

「あたしは無傷です。それより目暮警部、蘭はどこに？」

佐竹が担架に載せられて、周りの目に晒されないように上から布をかけられていた。

それを横目で見つつ、警部に聞いた。

「ああ、蘭くんならここの外におる。事件のことならまた後日警察に来てもらうから、早く行ってあげなさい。君のことを凄く心配していたようだからね」

「ありがとうございます」

目暮の優しい気遣いに、新一は軽く頭を下げた。

そしてその場からすくつと立ち上がり、急いでばたばたと駆け出す。



倉庫の鉄の扉辺りから出ると、吹き抜けの近くに蘭が立っていた。俯いて目を伏せ、どこか悲しげで憂いを帯びたような表情。新一が、そこから出て来たことに気付いてないのだろうか。

「蘭」

静かに名を呼ぶ。

その呼ばれた蘭は顔をあげてから、こっちに走ってくる。

「よかった。ごめんね、わたしが新一を独りにしたから」

俯いていたときの顔よりも少し明るめ。しかしやっぱり、負の感情がうかがえる。

軽く目を潤ませている姿に責任を感じて、思わず目を逸らす。

「バー口、オメーのせいじゃねーよ。悪いのは犯人<sup>わり</sup>なんだからよ」

ポン、と蘭の頭に手を置いて、さっきまで自分がいた部屋の入口を見つめる。

二人とも顔をちょっと赤らめていて、周りから見たらどんな状況なのか分からないだろう。

実際は”あいり”を蘭はちゃんと新一と分かっている。

静かに慰めてくれた新一に、蘭は目をそっと閉じて心の中で言う。

（姿はあいりでも、やっぱり新一だね。目を閉じれば、隣には新一がいるって分かるよ）

目を閉じたまま隣を見ると、顔をうつすら赤らめている新一の姿が見える気がした。

目を開けてから蘭は、あることをぱっと思い出した。

「ねえ新一、犯人は佐竹さんなんですよ？」

こう静かに言った。

「ああ。知ってたのか」

容疑者の三人の内、ある一人がいなくなってしまったと言う話。そして蘭は、新一よりも先に、犯人が誰だと確信していたのだ。そのいなくなった人は、もちろん佐竹のことだ。

その話を知ったのは、新一に頼まれごとをしたとき。それを思い出して、蘭はまた一瞬自分の責任を感じる。

しかしそのことを新一が感じ取ったのか、蘭、と呼ぶ。あ、うん、とあいまいな返事をする。

それから、新一の顔を見てから話を変えた。

「その血、もしかして佐竹さんに傷つけられたの？」

「へ？」

身に覚えの無い新一は、蘭に差し出された鏡を受け取り、それをぱかっと開いて鏡の中の自分の顔を見つめた。

「あ、本当だ」

頬の辺りに、幾つか紅い点があった。そこをさすりながら、鏡を蘭に返す。

蘭は心配そうな表情をしながら、鏡をバッグの中にしまいこんだ。

「犯人の返り血だよ。オレは無傷だから、心配すんな」

「返り血？」

びっくりしている蘭に、新一は今まであったことをすべて話した。

新一は話している間、佐竹が担架に乗せられて運ばれていくのが見えた。

一旦話を中断させて、その姿に視点を合わせる。

「戸田さんと同じになりたくなかった、か」

「えっ？」

（けどあんたは、たった一瞬でも自分の犯した罪を隠そうとした。結果的には、戸田さんと同じになっちまったんだぜ）

不思議そうな顔をしている蘭を横目に、そんなことを思った。

## 第十五話：再会・その2（後書き）

やっとお届けできました。お待たせして申し訳ありません・・・（涙）話は変わりますが、次回でいよいよこの話の完結となります。そうすれば、他の放置状態の小説たちも更新できるかと思えます。ちなみに、この話の番外編はネタが思い付いたら短編で書こうかと考えています。多分、連載は無いですね。話が横道にそれましたが、次回の更新を楽しみにしていってくださいね。

## 第十六話：そして

事情聴取を終え蘭の家に着いてから、新一はやっとブーツを脱ぐことが出来た。まさかこれがこんなに変なものとは知らなかったため、脱いだ途端に開放的な気分になった。玄関先に座ったままふっとため息をついている新一に、隣にいる蘭は冗談ぽく言った。

「女の子も凄く大変なこと、分かった？」

「ああ。買い物がいだけじゃねーってこととか、色々とな」

「園子と買い物行くときには、今日よりもっとかかるけど？」

「そ、そーか」

冗談じゃねえ。そう呟いて、新一は立ち上がった。

「新一、これからどうするの？ 哀ちゃんが薬を完成させるまで」

後ろからの言葉に、新一は前を向いたまましばらく考え込む。

「これからは、博士の家にいさせてもらうことにするよ。何かあった時に色々と便利だしな」

そして、蘭に振り向いてこう言った。その時に髪が前について来て、邪魔くさいと思った。

「じゃあ、薬が出来て元に戻ったら……ね」

「ああ」

「戻ったら」とねの間の言葉の予測が何となくでき、目線を多少動かした。

「またな」

あいりが笑顔で言うと、蘭もまた笑顔を返した。

哀のメールの通り、週末。新一は哀の完成させた薬を飲んで、元の姿に戻れた。そして一番に、蘭の元に向かうことにした。本人は、

蘭と一時の別れをしたその日からそう決めていたのだ。

（もうすぐだからな）

探偵事務所の前に到着した。蘭のことを思い、二階の窓に目をやる。そこから視線を外してから、コンクリートの階段をゆっくりと踏みしめていく。

事務所の扉の向こうからは、蘭の声が聞こえてきた。話し方や蘭の声しか聞こえないことからして蘭は電話しているのだろうと予想できた。

「じゃあね園子、また明日」

電話を切ったのだろう。丁度いいと思い、新一は事務所の扉のノブに手をかけた。それを回して事務所に入ろうとした瞬間に、受話器を元の位置に戻した蘭と目が合った。

「新一じゃない」

どこか嬉しそうな表情を浮かべる蘭。それに新一も表情が緩む。

「久しぶり、だな」



そう言いつつ、電話の近くにいる蘭に歩み寄り、一メートル位のところまで立ち止まった。

「うん。おかえりなさい、新一」

その新一に、蘭は向き合って言った。

「ただいま」

新一の言葉を聞いてから一息ついて、蘭は改めて呟くように言った。

「やっぱり、新一の声を聞くと落ち着くな」

「へ？」

思わぬ言葉に、思わず顔が赤らむ。

「どうしてだ？」

「中身が新一なのと、本当の新一って言うのは……同じだけど、違うんだから」

「そうか？」

蘭の言葉を聞いても、どこか腑に落ちないところがあるらしい。蘭は、それはいいとしてと言葉を繋げた。

「本当に会えて良かった。帰ってきてくれて、ありがとう」

目を幾らかパチクリさせてから、新一も言った。

「オレも帰ってこれで良かった。ずっと、待っていてくれてありがとう」

久しぶりに会った二人は、少しだけが素直になれていた。これはきっと、副作用の賜物。

## 第十六話：そして（後書き）

最終話の更新です。最終話は勿論、この小説全体は如何でしたか？  
コナンノベルズに初投稿したもので、突っ込みどころ等々ダメな点はたくさんあったと自覚しておりますが・・・私にとつては思い入れが深い作品です（初投稿作品と言うこともありますが）。この作品での反省点を次に活かせるようにまた頑張っていきたいと思っています。また、続編についてですが、一週間後か一ヶ月後かはたまた一年後か・・・いつになるかは分かりませんが、書きたいと思います。それまで楽しみにしていて下されば嬉しい限りです^^

### 【追記】

今更ですが、文中の台詞部分の修正を致しました。台詞を一行で纏めるとか「・・・」を「…」に変更するとか、台詞中の最後の文にくつついていた「。」を消したりとか諸々……。本文はほとんど変更していません。多分これからもよっぽど気が向かなければ、本文に限っては修正することはないと思います。

この作品を改めて読んだ時、色々ところばずかしい部分がやたらと目に付きました（苦笑）　そこから考えると、この作品を投稿していた時に比べれば上達できたのかな？　と少しばかり思います。これからも、今書いている作品を後で読んで同じようなことを感じられるように頑張っていこうと思います^^

では、失礼致します。

2008・1・2 都神紗茅

余談ですが、上の日付けを書こうとした際に「2007」と間違えそうになりました（^^;）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6475b/>

---

副作用の賜物

2010年10月10日14時07分発行